

『今月の天候と農作業』

通巻第5631号

9月号

令和元年8月29日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 8月31日(土)～ 9月6日(金)

前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、31日は雨が降るでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 9月7日(土)～ 9月13日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 9月14日(土)～ 9月27日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

1 病害虫防除

「トビイロウンカ」の警報が出ています。多発すると坪枯れや反枯れといった被害につながる恐れがあります。「カメムシ」との同時防除を基本に水田での発生状況を確認し、発生が多い場合は臨機防除を行います。「カメムシ」は、穂揃期とその7～10日後の2回防除を必ず実施します。「穂いもち」の防除は出穂前と穂揃期頃に必ず行います。

2 水管理

根の活力を維持し登熟を良くするため、収穫の5日前迄間断かん水を続けます。この間は落水時でも土が乾くことがないように湿潤状態を保ちます。台風時は深水で倒伏軽減を図ります。台風通過後も吹き返しの高温・乾燥風により品質低下が起こる場合があるため、風が止むまでは湛水します。倒伏した場合、籾が水に浸かると発芽しやすくなるため、穂先を隣の株の上に乗せるなどします。

3 収穫

早いところでは中旬頃から収穫作業となります。収穫適期は籾全体の8割程度が黄化した頃です。高温での急激な乾燥は、食味や品質が低下するため、注意します。仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにします。

◆大豆

湿害防止のため、圃場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は「紫斑病」や「カメムシ」の防除を行います。「ハスモンヨトウ」は老齢幼虫になると薬剤の防除効果も劣るため、観察を入念に行い、早めに防除を行います。特に孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に摘み取り処分することも効果的です。

◆そば

1 排水対策

そばは湿害には弱く、長時間帯水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するため、排水溝を設け生育期間中も、排水を徹底します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆施設野菜全般

きゅうりやピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行ない、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいため、かん水不足に注意します。

また、適期に定植し、スムーズに活着させることが最も重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

かん水管理は、定植の5～7日前にかん水チューブ等を利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植直後は活着を促進するため、株元を中心に丁寧にかん水します。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期ですが、定植後から収穫開始期までの管理で草姿は決まります。根を十分に張らせ、コンパクトな草姿に仕上げることが収量、品質向上につながるため、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢の調節を行います。また、定植の早いものは主枝の摘心期ですが、摘心を行う1週間前には1回目の追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

◆ピーマン

接ぎ木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向があるため、通常（12 cmポット苗）よりも2週間程度早めに定植を行います。かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど、草勢を強めに保つことが必要です。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を2次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、定植後にかん水量を制限する管理を行いますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼすため、少なめのかん水量で回数を多く施用するようにします。

◆いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令等の影響が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃であるため、その2～3日前から検鏡を行います。花芽の分化を確認して、9月中旬以降に定植します。

なお、定植は採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等のおそれのある苗は除去します。

（黒木正晶）

葉茎菜類及びいも類

キャベツ、はくさいの定植、ほうれんそう、だいこん、ごぼう、にんじんの播種期です。

排水性に優れ、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い、発芽揃いや初期生育を促すことが重要です。

生育初期はネキリムシの被害を受けやすく、蝶目害虫や甲虫類の食害や雑草の発生も多いので防除対策は重要です。

◆にんじん

8月に播種したものは間引きの時期です。株間は8cmを目安に年内出荷は広め、年明け出荷は狭くすることで、適度な太さに制御し、上物収量アップにつながります。干ばつによる発芽不良や、大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しします。多少地域間で差はありますが、遅くとも9月20日頃までには播種を行います。

◆ほうれんそう

下旬からが播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してpH7を目標に調整します。播種後、除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎると除草剤の効果が薄れるため、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態除草剤を散布します。

◆食用かんしょ

普通掘りの収穫期です。生育日数が130日以上になるといもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいため、若齢幼虫期を逃さず農薬防除を行います。地際の茎や芋の腐敗、立ち枯れが起きている株は、速やかに抜き取り堆肥舎で腐熟させるなどして、ほ場や周辺に残さないようにします。

◆さといもやかんしょなど収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害の伝染環を絶つため、収穫が終わった畑は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し、堆肥舎で腐熟させます。ほ場外に持ち出せない残さは、トラクタ速度は遅く、ロータリー回転は早めて、できるだけ細かく破碎します。畑や水路近くに残さを放棄することは決してしないでください。無発病の畑や種芋を採取する畑に入るときは、他の畑作業で使用した農機具や長靴を洗浄して使いましょう。

（杉村 幸代）

果 樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は樹上選果を行いながら、着色や糖度などの基準に基づいた出荷を行きましょう。また、カメムシの飛来時期であるため、特に台風通過後は注意しましょう。

収穫後の気温が高く推移する場合、秋芽が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋芽が発芽しなくなってからマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆完熟きんかん

肥大促進のために、9月末までに摘果を終了しましょう。

今年は開花期前後の管理状況によって、結果時期に差が見られます。結果時期が遅く、果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、10月上旬にはビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも3℃程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

◆マンゴー

後期出荷作型園では、剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生や伸長を促進しましょう。また、枝の緑化遅れは、花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布で早期緑化を図りましょう。

9月の日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンは全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。病害防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫は毎日行い、温度の低い早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。家庭選別を徹底し、実炭そ病や害虫による被害果の混入を防ぎましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆秋ギク

「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から4日間程度実施します。

なお、栽培地域や気候によって花芽発達の色が異なりますので、事前に必ず花芽検鏡により発達ステージを確認した上で開始日を決めてください。

◆スイートピー

植え付け後の水管理については、植え付け後1週間程度は乾燥しないように根締めかん水を行い、その後は根の張りを良くするために徐々にかん水間隔を広げてください。

光線管理については、植え付け後10日～2週間は遮熱性の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候や時間帯に応じて適宜遮光を行ってください。

◆デルフィニウム

沿海地域では年内出荷作型の定植期になります。

高温による早期抽だいを防ぐために、定植前に遮熱性の高い遮光資材で遮光するとともに、十分にかん水を行ってください。

◆トルコギキョウ

沿海地域では年内から年明け出荷作型の定植期になります。

苗を定植前に極端に乾燥させたり、高温に遭遇させたりするとロゼットを起こす場合がありますので、出庫後は速やかに定植しましょう。

◆キイチゴ

気温の低下とともに腋芽や新しい枝の伸長が盛んになります。

伸長した枝はすべて収穫せず、樹勢維持並びに来年度に向けた株養成のための枝とし3～4本程度は必ず残しましょう。

◆ホオズキ

ウイルス対策としてほ場の腐熟処理を行う場合は、カーバムナトリウム塩液剤等による古株枯死を行います。

その後、堆肥や残渣分解資材を投入し、月1回程度の耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理を行うことで、ほ場に残った残渣の分解を進めましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

8月末現在で、岐阜県、愛知県を主体とした7府県において、豚コレラの発生が38例発生し、野生イノシシにおいても、岐阜県、愛知県の隣県でも豚コレラ陽性事例が確認され、感染が終息していません。また、アフリカ豚コレラは、東アジアで感染が拡大しており、渡航者の携帯品からは、ウイルス陽性事例が確認され、国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から農場を守るため、豚舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

気温の日格差が大きくなる時期です。また、台風の影響も予想されるため、十分な対策が必要となります。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下も出始めることから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。

昼は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑さ対策を行います。夜間は急に気温が下がるため、気温差で家畜が体調を崩さないように、温度管理を十分に行いましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料では台風の影響が危惧されますが、天候にあわせた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエン麦の作付け時期になるため、計画的な作付け作業を行いましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

本年は、8月に入り台風2つが本県に上陸又は接近しています。これからの台風情報には特に注意を払いましょう。加えて、これからの作業は、翌年の一番茶収量と品質確保に大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行いましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害（幹割れ・冬芽の凍害等）を受けやすくなります。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1～2トンを施用し、軽く耕耘を行いましょう。さらに、計画的な深耕を行うと発根が促進され、肥効率向上にもつながります。但し、今年中切り更新した茶園の深耕は控えましょう。

2 病虫害の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。網もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期に多発するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類は、茶園をよく観察し、適期防除に努めましょう。

また、県内の茶園ではチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。茶園を注意深く観察し、すす病等異常がある場合は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

（黒木 清人）

◆しいたけ

1 原基づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基は20℃前後で最もよくできます。

原基の形成促進のため、十分な散水とほだ倒しを行います。原基固定期間（中低温菌：9月下旬～）は、ほた木の移動、天地返し、古ほだ整理を行わず、天地返しは9月中旬までに終了してください。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、適度な湿度が確保でき、暖かい方位（南～東南斜面）で、風当たりが少なく、排水のよいところが良く、日光がチラチラ差し込む林内が適しており、散水施設のための水源が確保できれば、なお良いです。

スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月の作業は、葉たばこの販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか出荷箱の確認を行いましょう。あわせて販売見込表を作成してください。また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合は、ピッキングを行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょう。

2 良質堆肥10a当たり1,200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

3 病害の耕種的防除の徹底を図るためにも夏期耕耘（最低深耕一回・耕耘二回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。

また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病（穂）	少	葉いもちの発生は、発生面積、程度とも平年より少ない状況です。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ（秋ウンカ）※ 斑点米カメムシ類	多 やや多	トビイロウンカの発生が、平年より多い状況です。9月の気温は平年より高いと予想されており、増殖率が高くなることが予想されます。ほ場での発生状況に注意し、発生密度が高い場合は、収穫前使用日数等に注意し追加防除や早期刈り取りを行います。 等級低下につながりますので、穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底してください。
大豆及び野菜類	ハモシトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫（アブラムシ類、アザミウマ類、タバココナジラミ類等）	－	アブラムシ類やアザミウマ類およびタバココナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫に対して、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用など、総合的な防除対策に努め徹底防除します。
	キュウリ黄化えそ病（MYSV）	－	本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
促成いちご	炭疽病	－	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株（半径3ポット）も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみ定植します。
さといも	疫病	－	各地で発生が確認されています。早生品種では、次作の発病防止のため、適期収穫と残渣のほ場外への持ち出しを行い、中生および晩生品種では、登録薬剤による定期防除に努めます。
サツマイモ	つる割病、基腐病、乾腐病、茎根腐細菌病	－	発病が見られるほ場では、収穫後の残渣をほ場や周辺に残さないようにしましょう。
果樹全般	果樹カメムシ類	－	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病	並	降水量が少ない場合でも1ヶ月毎の防除を実施します。
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	少 並	ミカンハダニは、平年より少ない発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病	やや少	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。 輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	輪斑病	並	
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホカ チャノキアザミウマ チャノミドリヒメコバエ クワシロカイガラムシ	やや少 並 やや多 並 並 やや少 少	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノホカは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。



1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は警報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki>です。